

ちなみに、田代三喜の『能毒集』も現存しており、その元姿をうかがうことができる。

(京都府京都市)

## 『本草綱目』の伝来と金陵本

真柳 誠

『本草綱目』のわが国への伝来年、およびその初版である金陵本の伝存については、従来からの定説がある。しかしこれに訂正・追加すべき知見を得たので報告したい。

『本草綱目』の日本への伝来は、これまで慶長十二年(一六〇七)とされてきた。それは『徳川実記』の同年四月の条に、「(林羅山が)長崎にて本草綱目を購求し、駿府に献じ奉る」と記録されるのによる。白井光太郎・南方熊輔・渡辺幸三・岡西為人・上野益三・木村陽二郎ら諸氏は、いずれもこの説を記している。

ところが林羅山の第三子の春斎がまとめた羅山の年譜(一六六二年刊『羅山先生集附録』巻一)には、定説を遡る記録が見える。「既見書目」と通称されるこの記録は、

羅山が二十二歳の慶長九年（一六〇四）までに見た四百二十余部の書名を列記しており、羅山自筆の目録に基づくという。「既見書目」に記されている医薬書は以下の十一書である。

『素問』『靈樞』『本草蒙筌』『本草綱目』『和劑方』『医經会元』『運氣論』『難經本義』『痘疹全書』『医方考』『医学正伝』

したがって長崎で入手した『本草綱目』を家康に献上した三年前の一六〇四年までに、林羅山がどこかで本書を見ていたことは疑いない。当然ながら本書の日本への伝来も一六〇四年以前となり、定説は改められる必要がある。羅山の研究者にこの事はよく知られているが、医学史や東洋医学の世界では旧説が通行しているので、敢えて注意を喚起したい。

一方、『本草綱目』の版本については、一五九六年刊の初版、いわゆる金陵本の伝存が少いことから、その所在と部数がとかく取り挙げられてきた。しかし各説では現存を四部とするものから、七部とするものまであり、所在も一定していない。そこで金陵本の確実な所蔵先を調査したと

ころ、以下のようであった。

① 国立公文書館内閣文庫 井口直樹の献本で曲直瀬玄朔の書き入れがある。

② 国立国会図書館 田沢仲舒の旧蔵で、榊原芳楚の献本。

③ 京都府立植物園大森記念文庫 白井光太郎の旧蔵本。

④ 東北大学附属図書館狩野文庫

⑤ 米・国会図書館 森立之の旧蔵本。

⑥ 中国中医研究院図書館

⑦ 中国・上海図書館

⑧ 武田科学振興財団杏雨書屋 現存は卷十九～二十八の

一〇巻で、小野蘭山・伊沢蘭軒の旧蔵本。

⑨ 宮城県図書館 現存は卷三十六～三十八の三巻で、伊達家の旧蔵本。

この他に伊藤篤太郎所蔵本・長沢規矩也旧蔵本、また独・ベルリン王立図書館に Georg Everhard Rumph の旧蔵本があるとかつて報告されている。しかしいずれも現在の所在は不詳となっている。

なお重民『中国善本書提要』によれば、金陵本の版木

を入手した程嘉祥がそれで一六四〇年に印刷。その版本は米・国会図書館に二部現存している。当版は出版者名の部分を彫り直したのみなので、基本的には金陵本と同版といえる。したがってこれと⑧⑨の残本を含めるならば、金陵本の現存は九箇所計一一組までが確認された。

各図書館の目録には、「万曆刊本」とのみ記録される『本草綱目』も少ない。今後、調査が進められるならば、それらの一部が金陵本と認められる可能性も考えられるであらう。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室)

## 小野蘭山・蕙畝と幕府医学館薬園

遠藤 正治

小野蘭山(一七二九—一八一〇)の幕府医学館における業績として、五次にわたる諸国採薬、本草講義とこれにもとづく『本草綱目啓蒙』の出版などはよく知られているが、医学館付属薬園の経営や薬品会の鑑定などにかかわる重要な業績については何故かこれまであまり注目されていない。蘭山の事業は、その没後、孫蕙畝(一七七四—一八五二)に引き継がれて幕末に及ぶが、蕙畝の医学館における活動は、本草講義を行ったかどうかさえ疑問視されるなど、ほとんど解明されていない。

本報では、蘭山の公勤日記『蘭山先生日記』三卷(小野強氏所蔵蘭山自筆本・白井光太郎写本)、蕙畝の『御用留』(小野強氏所蔵蕙畝自筆本)および『蕙畝日記』二十五卷